



学校だより

江戸川区立西葛西中学校

校長 川崎 純一

令和8年1月13日 第10号

丙午に思う

新学期が始まりました。今年の正月は晴天の元旦、2日夜の雪と天気が目まぐるしく変化しました。寒い中で迎えた3学期初日でしたが元気にあいさつを交わしながら登校する生徒の姿に安心と頼もしさを感じました。

さて、今年の干支は「丙午（ひのえうま）」です。「丙」は、太陽のように明るく、勢いがあり、外へ向かって広がるエネルギーを表します。「午」は、行動力・情熱・前進の象徴とされます。この2つが合わさると「情熱・変化・転換・決断」の年とされ、物事が表に現れやすく、変化や動きが生まれやすい年といわれます。現代では「大きな変化を生み出すエネルギーを持つ年」と前向きに捉えられています。新たな挑戦を始めるのにとっても良い年とされています。自分の考えをはっきりと示す場面が増えたりすることもあるでしょう。だからこそ大切にしたいのは、勢いだけに任せるのではなく、一度立ち止まって考える姿勢です。

生徒たちには、自分の思いを大切にしながら、相手の考えに耳を傾け、互いを尊重する姿を育んでほしいと願っています。また、強いエネルギーは、周囲を照らす「希望の灯」として使われたとき、学級や学校全体を温かく明るくするはずです。

難しいかもしれませんが、変化を恐れず、とは言え独りよがりにならず、情熱を未来につなげる知恵を持ち、自分の夢を追いかけ、実現する年にすることを願っています。

これからのおもな行事予定

月	日	曜	行事
1	13	火	校内書初め展
	15	木	避難訓練 歯みがき day (1組)
	16	金	放送による百人一首大会 歯みがき day (2組)
	19	月	全校朝礼 歯みがき day (3組)
	20	火	特別時間割1,5カット(給食後下校)
	21	水	歯みがき day (4組)
	22	木	1年前日指導 歯みがき day (5組)
	23	金	1年校外学習 2年百人一首大会
	26	月	生徒会朝礼 歯みがき day (6組) 都立高校推薦選抜(~27)
	29	木	2年前日指導
	30	金	2年校外学習 1年百人一首大会
2	2	月	全校朝礼 都立高校推薦発表
	10	火	作品展覧会準備 都内私立高校一般入試始
	13	金	作品展覧会 学校公開
	14	土	土曜授業 作品展覧会 学校公開 入学説明会
	16	月	生徒会朝礼

干支(えと)の話

恐らく自分の生まれた年の干支を知らない人はいないでしょう。ねずみ、うし、とら…という動物を指すものが一般的です。知っている人も多いと思いますが、有名な干支の順番についての言い伝えを紹介します。

「昔、神様は動物達に、“元旦に神殿へ早く来たものから順番に1年交代で、その年を守ってもらい動物の王様にしてあげる”と言いました。動物達が身支度を始めるなか、いつ行くのかを忘れてしまった猫はネズミに尋ねました。するとネズミは“1月2日”と嘘を言います。ウシは歩くのが遅いからと言って皆より一足先に出発しました。その時、ネズミはちゃっかりとウシの背中に飛び乗りました。早く出発したウシは、一番乗りで神殿につき、門が開いて中に入ろうとすると、背中に乗っていたネズミが飛び降りて先に神殿に入ってしまった。こうしてネズミは1番目の干支に、ウシは2番目になりました。ネズミに嘘を教えられて干支の仲間になれなかった猫は怒って、この日からネズミを追いまわすようになりました。」という話です。

この話には更に続きがあり、13番目に到着した動物はイタチでした。イタチはネズミが小さくて見えなかったので、自分は12番目だと思って待っていました。しかし、神様から13番目だと言われ、イタチは嘆いて“ウシの背中に乗っていたネズミが見えなかった”と神様に訴えると、慈悲深い神様は毎月イタチを載せてあげようということにしました。それから毎月1日のことを「つイタチ」と呼ぶようになったそうです。

さて、“干支”と書くように本来の意味は干(かん)と支(し)の組み合わせのことをいいます。古代中国では十干(10進法)と十二支(12進法)によって、年・月・日・時・方位・角度・物事の順序等多くのことに使っていました。農業と狩で日々の糧を得ていた当時の人々の大半は字が読めなかったため、作物の成長度をはかるため一年を12に分け、わかりやすいように動物を当てはめたとされています。

また暦には五行陰陽思想による十干が残っています。自然界は木、火、土、金、水の五つの要素で構成されており、更に“陽”を表す兄(え)と“陰”を表す弟(と)に分けると、10になります。これが十干と言われるものであり、木の兄(きのえ=甲)・木の弟(きのと=乙)、火の兄(ひのえ=丙)・火の弟(ひのと=丁)、土の兄(つちのえ=戊)・土の弟(つちのと=己)、金の兄(かのえ=庚)・金の弟(かのと=辛)、水の兄(みずのえ=壬)・水の弟(みずのと=癸)となります。



そして、年の呼び方には、10(十干)と12(十二支)の最小公倍数である60通りがあります。このようにして暦は60年経つと元に戻ることにになります。これが還暦です。

年を指す時に通常西暦や元号(平成、令和等)を使用しているため、干支というのは馴染みが薄いようですが、西暦から干支を簡単に求める計算式があります。まず、十干を求めるには、西暦から3を引いて10で割ります。余り1=甲、2=乙…余り0=癸となります。例えば今年は2026年ですから3を引いた1の位は“3”即ち“丙”となります。次に、十二支を求めるには、年数から3を引いて12で割った、余りの数字を求めます。1=子、2=丑となり、余り0=亥というように、その数字の順番がその年の十二支に当たります。同じように2026から、3を引いた2023を12で割ると、余りは7、7番目の“午”となります。この組み合わせによって、今年の干支は“丙午”となります。

ちなみに甲子園球場開園は大正13年で西暦1924年ですから、(1924-3)÷10=192…1⇒甲。(1924-3)÷12=160…1⇒子。あわせて“甲子(きのえね)”。甲子園球場は開園した年を名称にしたことがわかります。

干支には表面に書いたように五行陰陽思想による意味があります。気になる人は調べてみてください。

余り	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0		
十干	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸		
余り	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	0
十二支	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥